

九巻お試し版

お試し版のため実際の作品より画質を落としてあります。販売中の物は高画質版で収録されておりますのでご安心下さい。

また、高画質 JPEG 版も同梱されています。

「おおっ、お？ う、あっ！」

(しまった！)

と茜は思ったがその時にはすでに手遅れであった。大きな揺れの中で、脂まみれのコンクリートではさしもの退魔忍もバランスを保てない。足がずりつと滑り、無様にも転んでしまった。

もちろん、イアハスターがその瞬間を見逃すはずが無かった。一気に無数の触手を放ち、まず弓を持った右腕、そして左腕にきゅつと巻き付く。

「くっ、この、舐めるでないわー！」

思いつきり触手を引つ張り引きちぎろうとするが、ゴムのような弾力を持った肉縄は少し伸びるだけでびくともしない。しかも、表面には無数の吸盤がついており、それがスーツ越しに皮膚に強く張り付いていた。

そうこうしている間に今度は右足、左足にと巻き付かれてしまう。

「たわいも無いな、退魔忍？ 歯したえがなさ過ぎる！」

といいながらイアハスターはしゅるるつと触手を巻き取り、自らの元へと引き寄せた。

「ぐっ……！」

抗おうにも四肢を拘束され、しかも床が脂まみれとあつては踏ん張りが利かない。抵抗むなしくいともあつさりど淫魔忍の胸元へ引きずり込まれてしまった。そして、後ろから抱きしめられる。

「ふふふ、お前なかなか良い臭いがするな。芳しい、極上のメスの臭いがするぞ」

汗に濡れたつややかな黒髪の臭いをスンスン嗅ぎながらイアハスターは嬉しそうに尻尾を下げた。「ふ、その臭いが貴様の死に土産になるかも知れぬからな、よく嗅いでおくがいいわ」

「おお恐い恐い。ならばお言葉に甘えて存分に堪能させてもらうとしようかねえ？」

そう言うと、イアハスターは茜の両脇の間から腕を伸ばした。

「……」

歴戦の退魔忍から見ても、その腕は明らかに尋常の物では無かった。腕と言つて良いのかどうかともわからないその表面はギラギラと脂に濡れまみれていた。そして指の表面には大小無数の吸盤がびっちり付いていたのだ。「この手で乳を舐められたヤツは数分と持たず絶頂に達してしまうのさ。お前はどうかかな？」と

いうと、吸盤付両手が茜の深紅のスーツ越しにお椀型の乳房をぎにゅつと採み潰す。

「んふっふっ！」

思わず声が出そうになるのを必死に噛み殺した。無数の吸盤が媚毒脂と共に乳肌を吸い付くと、その部分がパチパチつと火花が散つたように熱く火照る。

そのままイアハスターは両の乳房をぐにぐにとこね回すように弄び始めた。

「あふっ……んはあっ……ん……っ」

吸盤がくつついてははがれ、くつついてははがれる。そのたびに媚毒脂で敏感になり始めた乳肌に猛烈なキスの雨を降らされているような心地よさがわき起こった。

吸盤のキスを受ける度にその部分から甘ったるい熱が乳房の中に浸透し、わだかまつていく。さらに力を込め、乳脂肪が凹むほどの強さでぐっ、ぐつとリズムカルに揉みしだかれた。

乳房の芯からジンジンとした甘い疼きが産まれ、胸全体に広がっていく。いつしか額には珠のような汗が幾粒も浮かび、頤を伝つてぼたぼたとしたたり落ちていった。

(っ……んっ、こやつ、思ったよりも芸達者じゃな……。予想より感じさせられておるわ……！)

茜の心に焦りが産まれる。

しかしそんなことにはお構いなくイアハスターは飽くことなく深紅の退魔忍の乳房を丹念に丹念に採み込んでいく。

ぎゅつと乳肉をへこまされれば、その部分から胸を焦がすような甘い快感が乳房一杯に広がる。そして胸乳の弾力にまかせるように力を弱め、戻りきったところできゅぽんと吸盤をはがされれば、敏感な部分をつままれるようなピリピリとした電気のような気持ちよさが乳芯に走る。

「どうだ？ 俺の手は。まんざらでも無いだろう」

と耳元でイアハスターがささやく。

茜はトロンと下がりそうになってしまいう目尻を必死につり上げ、

「はっ！ この程度の責めをする淫魔忍など腐るほどおったわ。みな儂が血祭りに上げてやったがの」

と言り返した。し

かし言葉尻そのものは挑発的だったが、肉体はすでに快感を享受し始めていた。満々と張り詰めて普段よりはワンサイズほどアップしたであろう乳房は内側はジンジンと甘い熱に炙られ、吸盤にたっぷり虐められた乳肌はピリピリと甘美な快感電流を発し続けている。そして何より、その先端で乳首どころか乳輪までもが勃起しているのが丸見えであった。

「ほう、欲張りな女だなあ、まだ弄られたりねえってことかな？ ならお望み通りもっと激しくやってやろう」

というどイアハスターの両手が茜の乳房を根本からぎにゆうううつと押しつぶさんがばかりの勢いで握りしめる。

「くはうっニう、くっはー」

胸の奥から絞り出されるように悦びの刺激が乳房全体に充滿した。そしてぐにりぐにりと粘土でも弄ぶかのようにこね上げられる。

「かううううううう……く……はっん……」

とうとう茜の口から熱っぽく湿った吐息が漏れた。胸が縦横無尽に変形させられ、さらに吸盤で吸われてはがされる度にいくつもの性感帯が開発されてしまっ。

（くっ……儂の胸が、魔改造されておる……わっ……！）

イアハスターの指が一本蠢く度に乳房から悦感が走り、全身へとしみ通っ

ていく。すでに下腹部は収縮を始め、膣からはとろつと愛液がこぼれ出し始めている。

しかし、淫魔忍の乳房揉み快樂地獄はここからが本番だった。

脂まみれのスーツ越しにはつきりと見える乳首を吸盤がたっぷり付いた指で揉み転がされたのである。くちやつという粘った音を立てて吸盤が乳首に張り付き、そしてふきゅつという音を立てて離れていく。敏感な肉突起はふるると震えながら、おぞましいまでの快感電流を炸裂させた。

「んほおおおおっつっつっ」

悦びの電流が脳髓を打ち抜き、茜のしなやかな身体が勝手に弓なりにしなった。全身の体温が一気に上昇し、身体中の汗腺からはほの薫る汗がわき出し始める。

さらにイアハスターは乳房をもリズミカルにむぎゅ、むぎゅと揉みながら、さらに吸盤指で乳首に吸い付いてパンチングボールのように縦横に弾き上げた。

「んひいっニんくううっつ、うおあっつっ」

敏感すぎる快感突起が脂まみれのスーツに舐めしゃぶられ、さらに弾かれるのだ。そのたびに乳頭で快感の爆発が何度も何度も炸裂し、ニ字に拘束された股間がぐいぐいっつとせり上がってしまう。

度重なる刺激でふつくらと開き始めた陰唇の奥から、とろりと愛蜜がこぼれだした。

「はほう……ようやく濡れてきたか。俺の乳房責めでここまで持ったのはお前が初めてだ。……んん、若さに満ちあふれたこの酸っぱい臭い……たまらん」

自分の愛液の臭いを寸評され、茜の顔が羞恥にさあつと紅潮する。

（くっ……ふざけおって……！）

「お、お褒めにあずかり光栄、とでもいえばいいのの？」

それでも相手に弱みは見せるまいと軽口を叩いてみせる。しかし、それが虚勢であることは見え見えであった。





「あぐ……あああ……うう……あ……ん」

自分がどうしてこんな所にいるのか、記憶が全く定かでなかった。全身に何か生暖かいような物がまとわりつき、身動き一つ出来ない。何かに座らされているようではあったが、意すら敷物の座面もどこかぶよぶよして頼りない感じだった。

もじもじとお尻を動かすと、ねちゃりとふしぎな音がする。そしてこんなにやくに擦られたようなお尻がぼおっと熱くなって、奇妙に心地よかった。

ズンツ！

「はうつつ!？」

突如、股間に強烈な一撃が加えられた。殴られたとかそういう物ではない。体の芯に重く響く衝撃だ。直後お腹の奥がじわあつと痺れて、全身に甘い震えが広がっていった。

全身が刺激に合わせてビクツ跳ねる。頭に桃色の霞が広がっていったが、逆に強い振動は意識をある程度はつきりさせてもいった。

「う……ボク……は……」

今までのことがゆっくり思い出されてくる。彼女の名前は美乃利。淫魔狩りを主任務とする退魔師忍者の里の中でもっとも若い方に属する、少女くノ一であった。

技術は里の上忍達からも折り紙付きの腕を持っていたが、今だ戦闘経験が少なく未熟で、単独任務は許されていなかったのだ。だが功を焦り、早く一人前と認めてもらいたかった美乃利は無謀にも一人で淫魔狩りに出かけたのだ。

資料に寄れば雑魚中の雑魚。

(ボクでも何とかなるはず……!)

そう思つて淫魔の巣へと向かった美乃利であったが、雑魚の姿は単なる擬態でしかなかった。その正体はどう見積もつても中級以上淫魔。まだ経験の浅い美乃利ではそれを見抜くことなどできはしなかった。

案の定美少女くノ一は老練な淫魔の手に良いように翻弄された。

敵の本体に触ることすらかなわず、淫魔の放つ電撃触手に乳首とクリトリスをかみつかれ、猛烈な電流を流し込まれたのである。

「うあああああつつつつ!!!」

美乃利の小さな身体が一センチほども跳ね上がり、メガネの奥のまん丸い瞳が大きく広げられた。

三つの敏感な尖りに青白い放電が見えるほどに強烈な電撃。心臓が止まるかと思うほどの激痛が身体の三角点に走り、次いでじんわりと奇妙な心地よさが筒先でわき起こった。

「あああつ、おああつ、おつ、はあ……!!」

桃色の電流と青白い電流が右乳首左乳首、そしてクリトリスの順番で瞬いていく。青白いところ激痛で、桃色は激感。痛みが快感を倍加させ、美乃利の意識を徐々にこそげ取っていく。

平らな胸が一回り以上も膨らんで、レオタードにも似た忍び装束の胸を可愛らしく押し上げる。わに口クリップのような触手で摘まれていた肉豆も硬度を増し、布地越しにもはつきり見えるほどになっていた。

特にクリトリスはその下の割れ目からトロトロと尿混じりの蜜液すらが垂れこぼれ始め、さらにその姿を主張してしまっているのである。電撃触手もそれに応えるかのように、クリを甘く噛んで強く青白い電撃を放ち、

「ああああんつつ!!」

次には柔らかくしゃぶるように甘がみして、桃色の電流で心地よい快



感を流し込んでくる。

「ふうわああああ……」。

こんな巧みな責めを続けられたのでは、経験未熟な美乃利ではどうしようもない。徹底的な三豆責めに気を幾度と無くやらされて、正気を失っていたのである。そして、今ようやく気が付いたというわけであった。

「う……………う……………」

椅子から起きあがろうとしたが、それは出来なかった。両手は肘掛けのような物に乗せられており、大人の足ぐらいはありそうな極太の触手に巻き付かれていた。美乃利の細腕ではどうすることも出来ないほどの太さである。

両脚も似たような物で、これまた極太触手にがっちり拘束されてぴくりとも動かすことは出来なかった。胴体にも拘束ベルトのように触手ががっちり巻き付いている。

「やっぱり……………まだボクには早すぎたのかな……」

完全拘束の状況になると、弱気が首をもたげてくる。しかし淫魔に捕らわれたくノ一がどうなるのか、まだ若い彼女でも知っている。

淫魔の雌奴隷になり、精を搾り取られるだけの存在になりたくなければここからなんとしても逃れねばならないのだ。

「やってやるんだから……………！　そしてボクの力をみんなに見せてやるんだから……………！」

「ようやくお目覚めかしら……………」

そんな決意に拳をぎゅっと固めていると、どこからともなく聞こえてくる声。しゃべり口調は女であったが間違いない男の声音であった。今まで戦っていた淫魔である。

「いわゆるおかましゃべりという奴でこの声を聞くだけで鳥肌が立つ思

いがした。

「ボクを、どうする気だっ!？」

声の出所は分からないが、弱気を見せないために吠えるように叫ぶ美乃利。それに対して淫魔はさもおかしそうに笑って応えた。

「そうねえ、どうしようかしらん？　まずあなたはスジが多くてゴリゴリしてて美味しくなさそうだから、私好みに料理してあげようかしらん？　心も体も、ね」

美乃利はビクリと背を振るわせた。

「……………食べられるものなら食べてみなよっ。貴様のお腹の中から食い破って出てきてやるんだからあっ!」

頭からむさぼり食われようがなんだろうが、みじめに死んだりなんかするもんか……………！

美乃利の悲壮な決意であった。だが、彼女は根本的な勘違いを犯している。敵は、淫魔なのだ。

「ほ？　ホーツホツホツホー!」

おかま淫魔は最初美乃利が何を言っているか分からないようであったが、勘違いに気づくと大声で笑った。

「そうよ、美味しく食べてあげちゃう……………。まずは圧力釜かしら？　料理には時間がかかる物だから、下ごしらえだけしてあたしはおいとまするとするわん」

「そう言いながら声が遠くなっていく。」

「まてっ……………ふうっ!!」

ズンズンっつっ！　と下半身に響く重い衝撃。そして深い快感がわき起こった。

「お……………あん……………何……………」

九老電子書籍版サンプル

発行：PaletteEnterprise

- 本書は18歳未満の方の閲覧をお断りしております。
- 本書の内容はあらゆる犯罪行為を肯定、助長する物ではありません。本書に記されている内容を実行した場合、犯罪行為となる恐れがあります。
- 本書の内容に関する権利は全て PaletteEnterprise が有しています。無許可での再配布（ネット上へのアップロード、対価を伴わない共有行為、交換行為を含みます）を禁じます。また、著作権法に定められた例外以外での複製は禁じます。該当事実を確認した場合、刑事法的処罰の請求、民事法的損害賠償の請求を行う可能性があります。